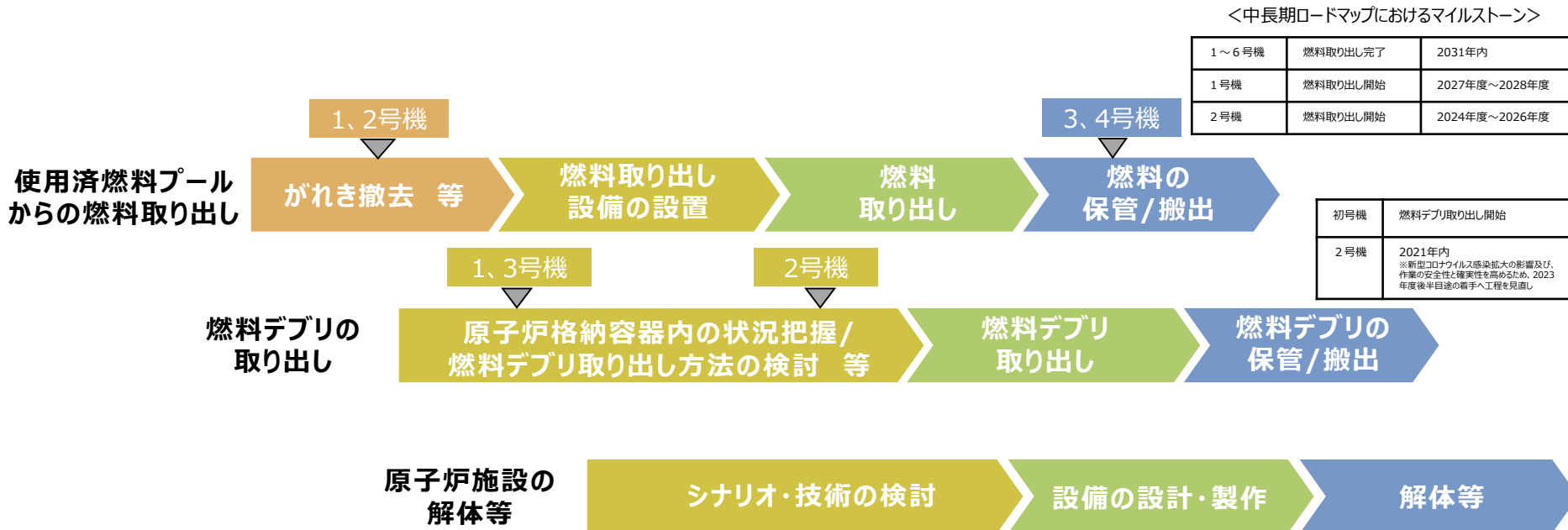


## 「廃炉」の主な作業項目と作業ステップ

使用済燃料プールからの燃料取り出しは、2014年12月22日に4号機が完了し、2021年2月28日に3号機が完了しました。引き続き、1、2号機の燃料取り出し、1～3号機燃料デブリ(注1)取り出しの開始に向け順次作業を進めています。

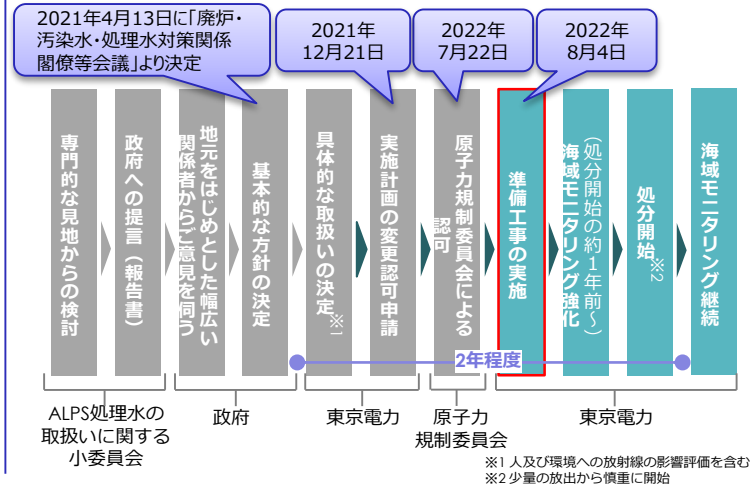
(注1)事故により溶け落ちた燃料



## 処理水対策

### 多核種除去設備等処理水の処分について

ALPS処理水の海洋放出に当たっては、安全に関する基準等を遵守し、人及び周辺環境、農林水産品の安全を確保してまいります。また、風評影響を最大限抑制するべく、モニタリングのさらなる強化や第三者による客観性・透明性の確保、IAEAによる安全性確認などに取り組むとともに、正確な情報を透明性高く、継続的に発信してまいります。



## 汚染水対策 ～3つの取組～

### (1) 3つの基本方針に従った汚染水対策の推進に関する取組

①汚染源を「取り除く」 ②汚染源に水を「近づけない」 ③汚染水を「漏らさない」

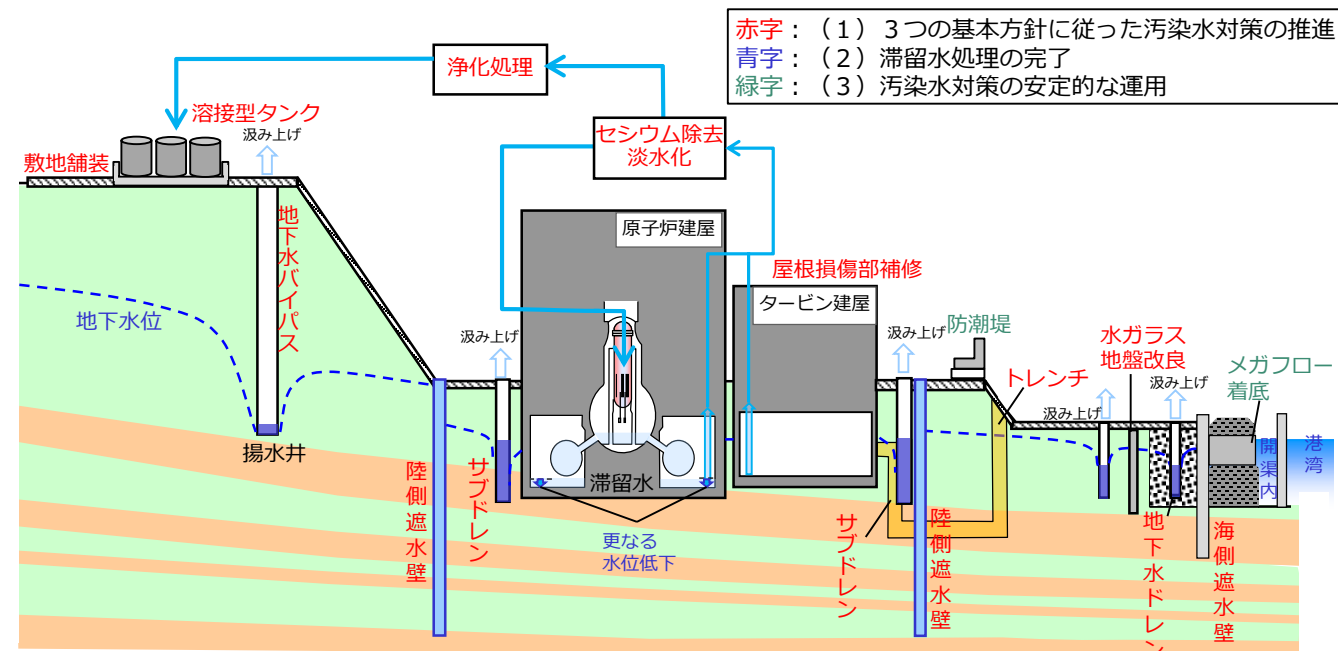
- 多核種除去設備以外で処理したストロンチウム処理水は、多核種除去設備での処理を行い、溶接型タンクで保管しています。
- 陸側遮水壁、サブドレン等の重層的な汚染水対策により、建屋周辺の地下水位を低位で安定的に管理しています。また、建屋屋根の損傷部の補修や構内のフェーシング等により、降雨時の汚染水発生量の増加も抑制傾向となり、汚染水発生量は、対策前の約540m<sup>3</sup>/日（2014年5月）から約90m<sup>3</sup>/日（2022年度）まで低減しています。
- 汚染水発生量の更なる低減に向けて対策を進め、2025年内には100m<sup>3</sup>/日以下に抑制する計画です。

### (2) 滞留水処理の完了に向けた取組

- 建屋滞留水水位を計画的に低下させるため、滞留水移送装置を迫設する工事を進めております。
- 2020年に1～3号機原子炉建屋、プロセス主建屋、高温焼却炉建屋を除く建屋内滞留水処理が完了しました。
- ダストの影響確認を行いながら、滞留水の水位低下を図り、2023年3月に各建屋における目標水位に到達し、1～3号機原子炉建屋について、「2022～2024年度に、原子炉建屋滞留水を2020年末の半分程度に低減」を達成しました。
- プロセス主建屋、高温焼却炉建屋の地下階に、震災直後の汚染水対策の一環として設置したゼオライト土壌等について、線量低減策及び安定化に向けた検討を進めています。

### (3) 汚染水対策の安定的な運用に向けた取組

- 津波対策として、建屋開口部の閉止対策を実施しました。現在、防潮堤設置の工事を進めています。また、豪雨対策として、土嚢設置による直接的な建屋への流入を抑制するとともに、排水路強化等を計画的に実施していきます。



## 取組の状況

- ◆ 1～3号機の原子炉・格納容器の温度は、この1か月安定的に推移しています。  
また、原子炉建屋からの放射性物質の放出量等については有意な変動がなく、総合的に冷温停止状態を維持していると判断しています。

### ALPS処理水海洋放出時の測定・評価対象核種の選定、体制変更について実施計画認可の受領

東京電力は、ALPS処理水希釈放出設備の運転・保守管理等の組織体制、海洋放出前に放出基準を満足していることを確認するための測定・評価対象核種、測定・評価対象核種の見直しを踏まえた放射線環境影響評価結果等を反映するため、2022年11月に実施計画変更認可申請書を原子力規制委員会へ申請し、2023年5月10日に認可を受領しました。  
引き続き、安全を最優先に、ALPS処理水希釈放出設備及び関連施設の設置工事を進めるとともに、国際原子力機関（IAEA）のレビュー等に真摯に対応し、客観性・透明性・信頼性を確保していきます。

### 海洋生物飼育試験に関する進捗状況

2023年5月に実施した1500Bq/L未満に希釈したALPS処理水で飼育したホンダワラ及び2022年11月から実施した30Bq/L程度に希釈したALPS処理水で飼育したヒラメのトリチウム濃度の測定結果が得られました。測定の結果、過去の知見及びヒラメやアワビ（トリチウム濃度1500Bq/L未満）の測定結果と同様に、体内中のトリチウム濃度が生育環境以上にならないこと、その後、通常の海水へ移した後に体内中のトリチウム濃度が下がることを確認しました。  
また、ヒラメの有機結合型トリチウム(OBT)濃度については、過去の知見と同様に概ね平衡状態に達しているものと推定していますが、引き続き確認していきます。

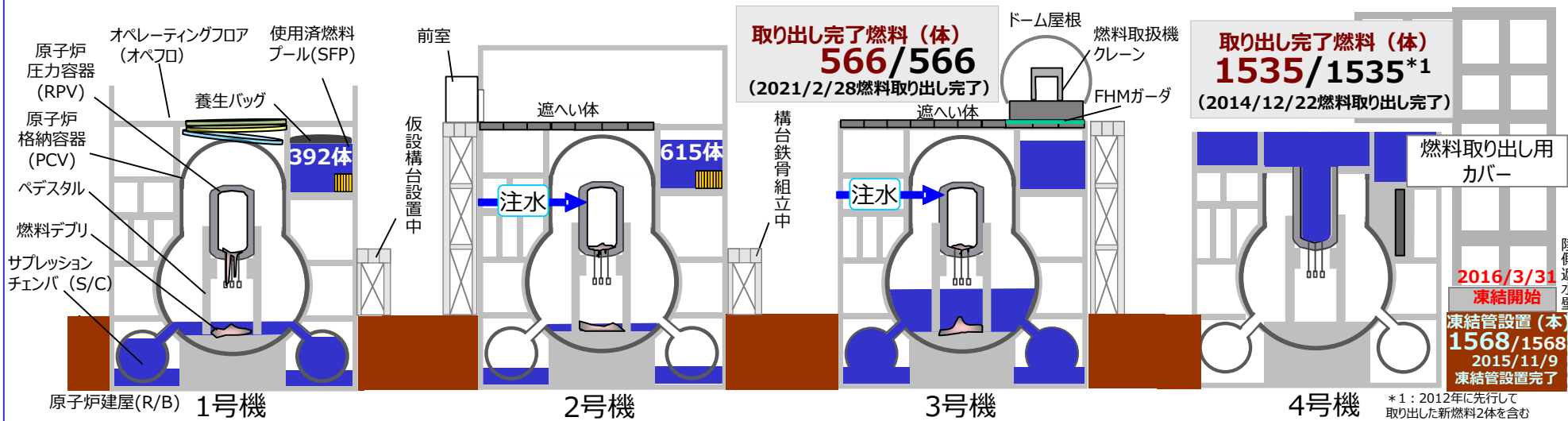
海洋生物飼育試験ライブカメラ

<https://www.youtube.com/channel/UCLEn8NHHX2WrMvn6ZYfAjJA>



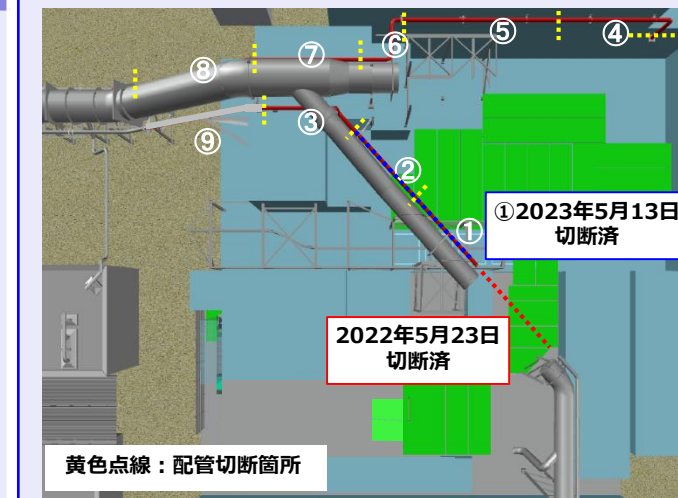
### 海域モニタリングにおける指標について

周辺海域のモニタリングで、放出水が十分に拡散していないような状況（トリチウム濃度の異常）等が確認された場合、設備の運用として「放出停止」を判断する際の指標を、「異常値」として設定しました。放出口付近（発電所から3km以内）のトリチウム濃度を700Bq/L、放出口付近の外側（発電所正面の10km四方内）のトリチウム濃度を30Bq/Lに設定しています。  
また、指標（異常値）の1/2程度を超える値が検出された場合には、速やかに、設備、運転状況や操作手順に問題がないことを確認するとともに、海水を再採取し、結果に応じて頻度を増やしたモニタリングを実施します。



### 1/2号機 SGTS配管切断作業の進捗

1/2号機非常用ガス処理系(SGTS)配管は、2022年5月に1箇所切断済みですが、加えて1号機原子炉建屋カバー設置等に干渉する箇所の撤去を計画しています。  
配管サポートの切断装置の不具合対応が完了し、発電所構内で模擬配管を用いた切断確認作業を実施した上で、計画している9箇所のうち1箇所目の配管切断作業を2023年5月13日に完了しました。  
引き続き、安全最優先で作業を進めていきます。



<SGTS配管切断の計画>

### 2号機 燃料取り出しに向けた工事の進捗について

建屋内では、オペフロ線量低減のため除染作業を実施しており、4月28日より吸引除染作業を開始しました。  
建屋外では、構外の低線量エリアにて組み立てた鉄骨を構内に搬入し、原子炉建屋南側において燃料取り出し用の構台の鉄骨の組み立てを実施しています。5月25日時点で全45ある鉄骨ユニットのうち19ユニットの設置が完了しました。



<鉄骨ユニットの組立の様子(5月16日時点)>

### 1号機 PCV内部調査における堆積物3Dマッピング調査結果

2023年3月4日から8日にかけて、1号機原子炉格納容器(PCV)の底部に水中ロボットROV-Bを投入し、ペDESTAL外への堆積物3Dマッピング調査を実施しました。  
今回の堆積物3Dマッピング調査結果と、2022年6月に実施したROV-Cによる堆積物厚さの調査結果を比較したところ、PCV底部からの堆積物の高さの結果について双方のデータに相関性が確認されました。  
また、ROV-Cによる堆積物厚さ測定では、一部堆積物の高さを評価しましたが、今回のROV-Bによる計34箇所の点群データの取得により、堆積物の高さの知見に関して、より広範囲かつ連続したデータを得ることができました。今後、より詳細な堆積物に係る調査について検討していきます。

# 主な取組の配置図

1号機PCV内部調査における堆積物3Dマッピング調査結果

2号機 燃料取り出しに向けた工事の進捗について

1/2号機 SGTS配管切断作業の進捗



海洋生物飼育試験に関する進捗状況

海域モニタリングにおける指標について

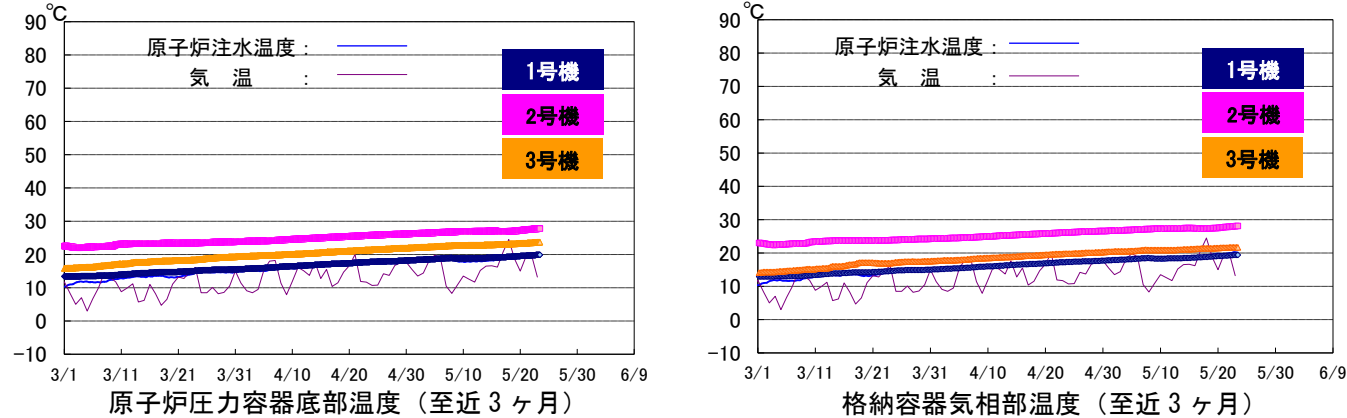
ALPS処理水海洋放出時の測定・評価対象核種の選定、体制変更について実施計画認可の受領

提供：日本スペースイメージング（株）2021.4.8撮影  
Product(C)[2021] DigitalGlobe, Inc., a Maxar company.

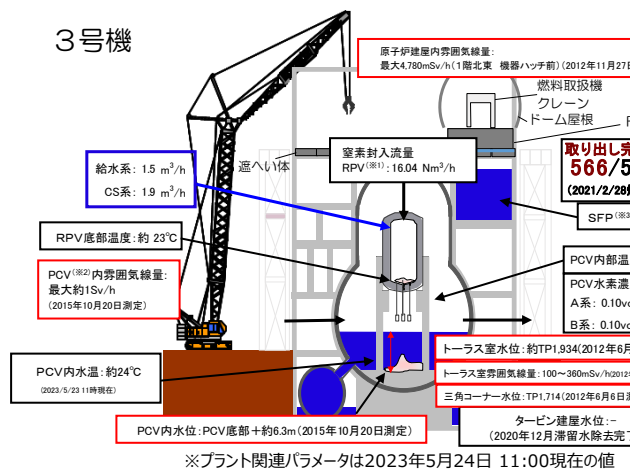
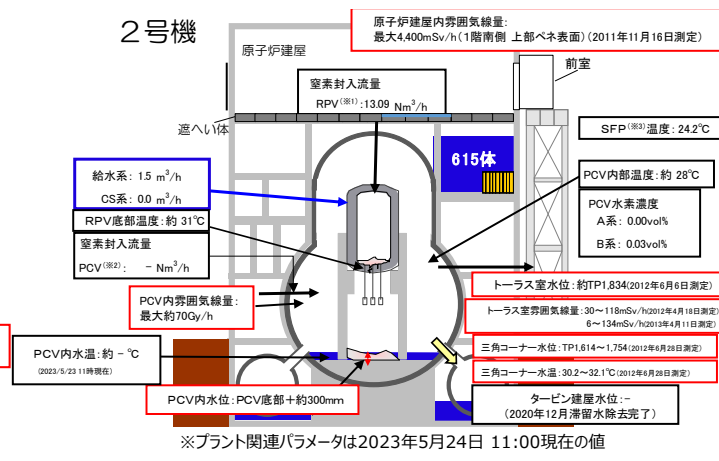
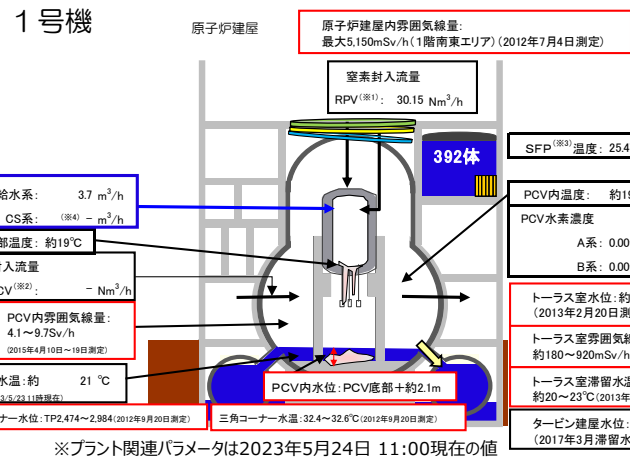
# I. 原子炉の状態の確認

## 原子炉内の温度

注水冷却を継続することにより、原子炉压力容器底部温度、格納容器気相部温度は、号機や温度計の位置によって異なるものの、至近1ヶ月において、約15~30度で推移。



※1 トレンドグラフは複数点計測している温度データの内、一部のデータを例示  
 ※2 設備の保守点検作業等により、データが欠測する場合あり

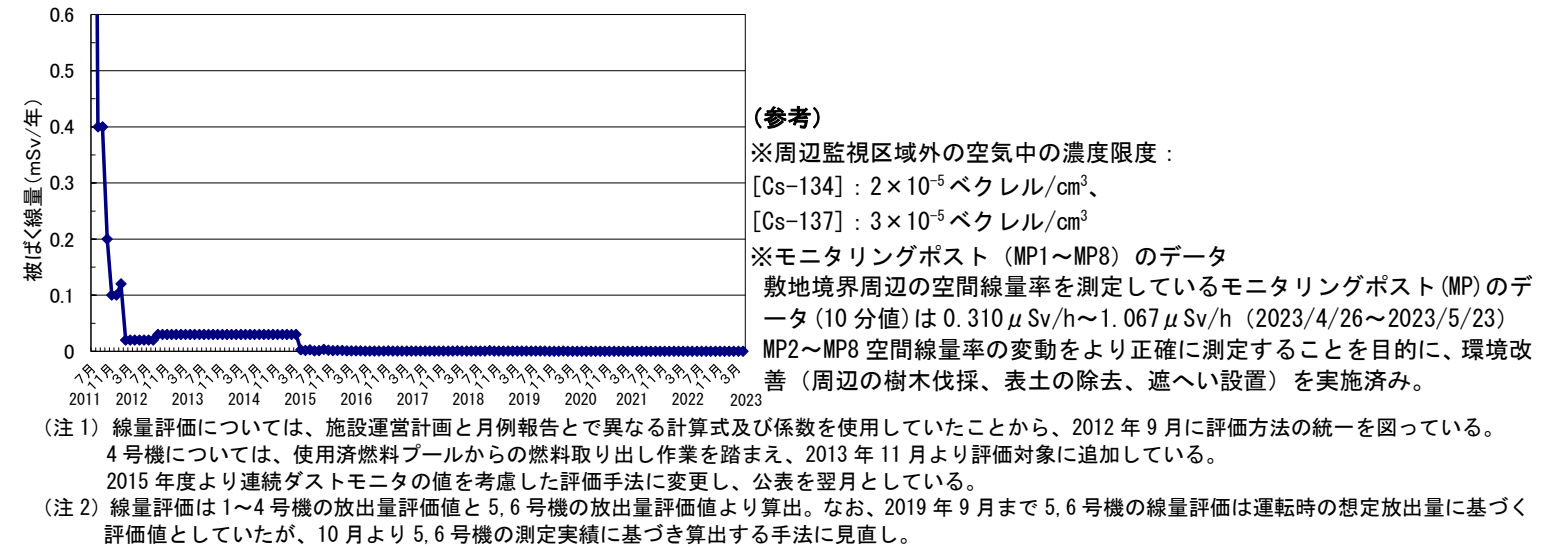


(※1) RPV (Reactor Pressure Vessel) : 原子炉压力容器。  
 (※2) PCV (Primary Containment Vessel) : 原子炉格納容器。  
 (※3) SFP (Spent Fuel Pool) : 使用済燃料プール。  
 (※4) 点検中のためデータ欠測。

## 原子炉建屋からの放射性物質の放出

2023年4月において、1~4号機原子炉建屋から新たに放出される放射性物質による、敷地境界における空気中放射性物質濃度は、Cs-134 約  $2.1 \times 10^{-12}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> 及び Cs-137 約  $1.9 \times 10^{-12}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> と評価。放出された放射性物質による敷地境界上の被ばく線量は 0.00004mSv/年未満と評価。

## 1~4号機原子炉建屋からの放射性物質（セシウム）による敷地境界における年間被ばく線量評価



## その他の指標

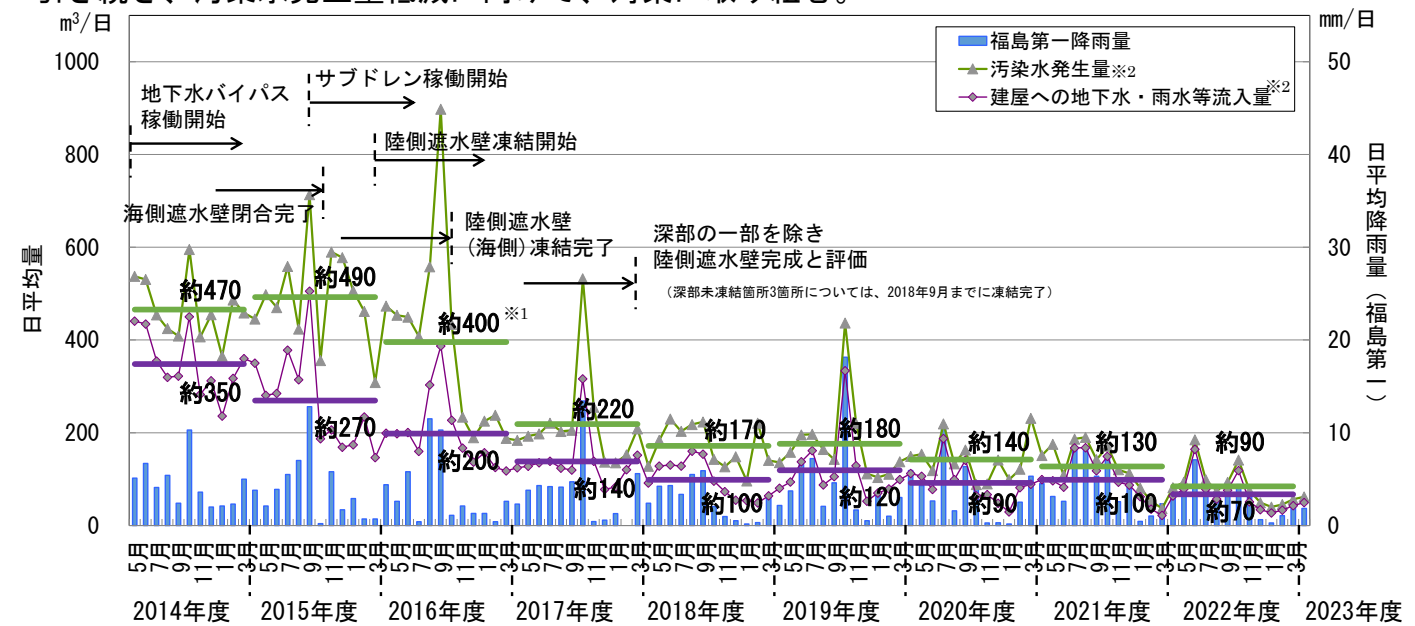
格納容器内圧力や、臨界監視の為の格納容器放射性物質濃度 (Xe-135) 等のパラメータについても有意な変動はなく、冷却状態の異常や臨界等の兆候は確認されていない。  
 以上より、総合的に冷温停止状態を維持しており原子炉が安定状態にあることが確認されている。

# II. 分野別の進捗状況

## 汚染水・処理水対策

### 汚染水発生量の現状

- 日々発生する汚染水に対して、サブドレンによる汲み上げや陸側遮水壁等の対策を重層的に進め、建屋流入量を低減。
- 「近づけない」対策 (地下水バイパス、サブドレン、陸側遮水壁等) や雨水浸透対策として建屋屋根破損部への補修等を実施してきたこと、また降水量が平年より少なく、さらに100mm/日以上集中豪雨がなかったこともあり、2022年度の汚染水発生量は約90m<sup>3</sup>/日まで低減。
- 引き続き、汚染水発生量低減に向けて、対策に取り組む。



※1: 2018年3月1日に汚染水発生量の算出方法を見直したため、第20回汚染水処理対策委員会 (2017年8月25日開催) で公表した値と異なる。見直しの詳細については第50回、第51回廃炉・汚染水対策チーム会合/事務局会議資料に記載。  
 ※2: 1ヶ月当たりの日平均量は、毎週木曜7時に計測したデータを基に算出した前週木曜日から水曜日の1日当たりの量から集計。

図1: 汚染水発生量と建屋への地下水・雨水等の流入量の推移

➤ サブドレン他水処理施設の運用状況

- サブドレン他水処理設備においては、2015年9月14日に排水を開始し、2023年5月16日までに2,154回目の排水を完了。  
一時貯水タンクの水質はいずれも運用目標を満足している。

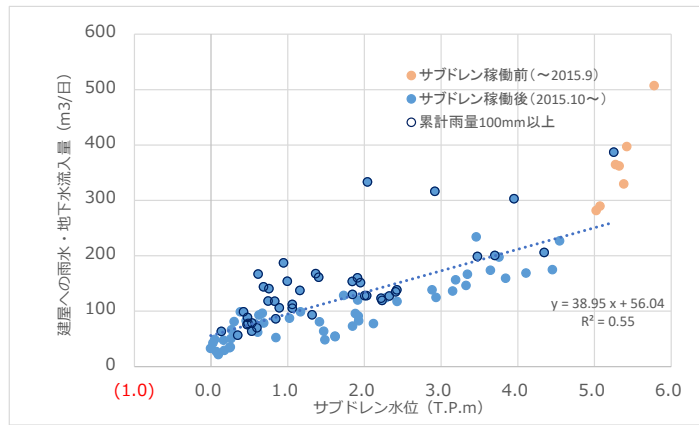


図2：建屋への地下水・雨水等流入量と1～4号機サブドレン水位の相関

➤ フェーシングの実施状況

- フェーシングについては、構内の地表面をアスファルト等で覆い、線量低減並びに雨水の地下浸透を抑制し建屋への地下水流入量の低減を図っている。敷地内の計画エリア 145 万 m<sup>2</sup>のうち、2023年4月末時点で約95%が完了している。このうち、陸側遮水壁内エリアについては、廃炉作業に支障がなく実施可能な範囲から、適宜ヤード調整のうえ進めている。計画エリア 6 万 m<sup>2</sup>のうち、2023年4月末時点で約40%が完了している。

➤ 建屋周辺地下水位の状況

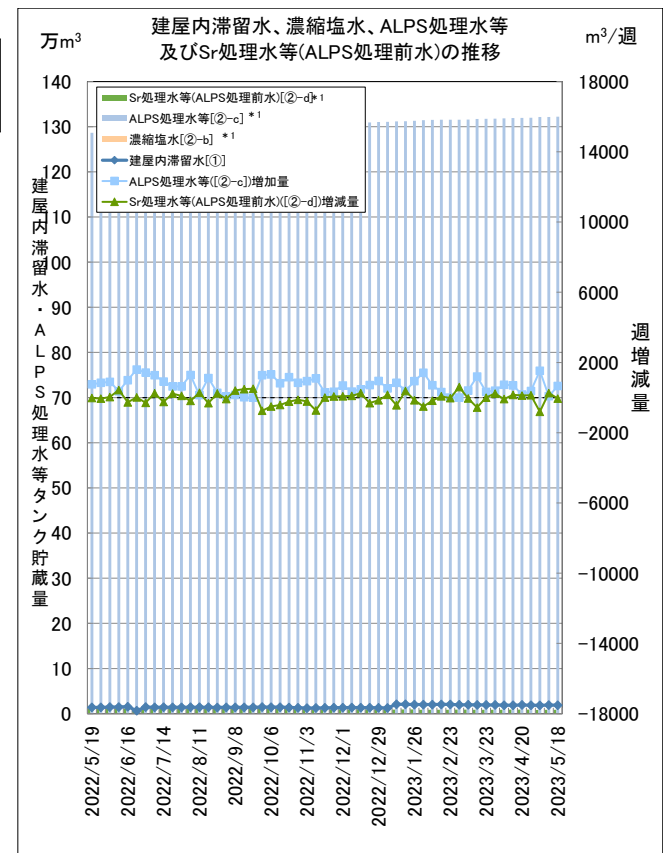
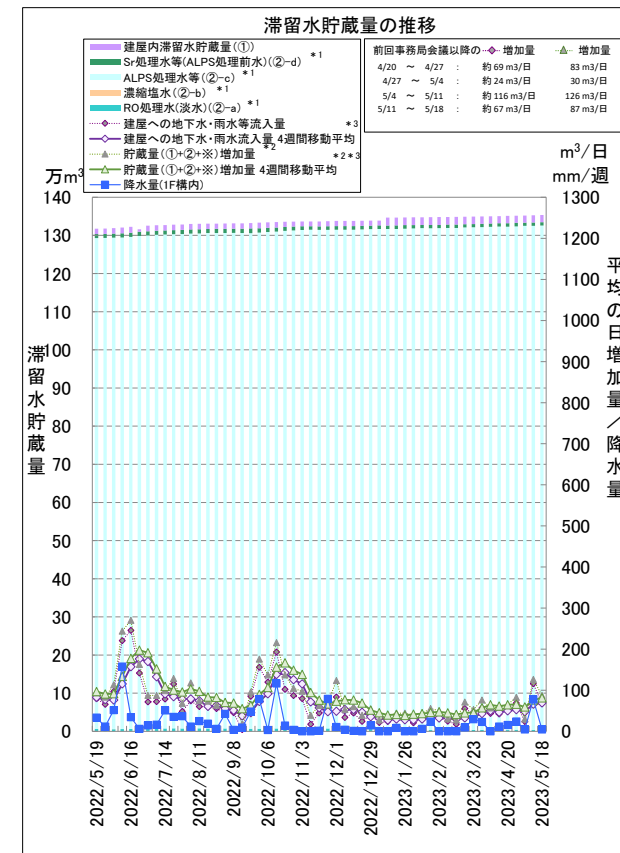
- 陸側遮水壁内側エリアの地下水位は、陸側遮水壁及びサブドレンの設定水位の低下により、年々低下傾向にあり、山側では平均的に4～5mの内外水位差が形成されている。また、護岸エリア水位も地表面 (T.P. 2.5m) に対して低位 (T.P. 1.4m) で安定している状況である。
- サブドレン設定水位は、2021年度は若干ながら低下 (T.P. -0.55m⇒T.P. -0.65m) 等により、T.P. 2.5m盤よりも1-4号機建屋海側の地下水位が低い状態 (大きい降雨時除く) が継続的に形成されている。

➤ 多核種除去設備等の水処理設備の運用状況

- 多核種除去設備(既設)は放射性物質を含む水を用いたホット試験を実施(既設A系:2013年3月30日～、既設B系:2013年6月13日～、既設C系:2013年9月27日～)してきたが、2022年3月23日に使用前検査終了証を規制委員会より受領し、使用前検査が全て終了。多核種除去設備(増設)は2017年10月16日より本格運転開始。多核種除去設備(高性能)は放射性物質を含む水を用いたホット試験を実施(2014年10月18日～)してきたが、2023年3月2日に検査終了証を規制委員会より受領し、使用前検査がすべて終了。
- これまでに既設多核種除去設備で約496,000m<sup>3</sup>、増設多核種除去設備で約756,000m<sup>3</sup>、高性能多核種除去設備で約104,000m<sup>3</sup>を処理(2023年5月18日時点)、放射性物質濃度が高い既設B系出口水が貯蔵されたJ1(D)タンク貯蔵分約9,500m<sup>3</sup>を含む)。
- セシウム吸着装置(KURION)、第二セシウム吸着装置(SARRY)、第三セシウム吸着装置(SARRY II)でのストロンチウム除去を実施中。セシウム吸着装置は2023年5月18日時点で約716,000m<sup>3</sup>を処理。

➤ ストロンチウム処理水のリスク低減

- ストロンチウム処理水のリスクを低減する為、多核種除去設備(既設・増設・高性能)にて処理を実施中。これまでに約883,000m<sup>3</sup>を処理(2023年5月18日時点)。



①：建屋内滞留水貯蔵量(1～4号機、プロセス主建屋、高温焼却炉建屋、廃液供給タンク、SPT(A)、SPT(B)、1～3号機CST、バッファタンク)  
 ②：1～4号機タンク貯蔵量 [(②-a)RO処理水(淡水)] + [(②-b)濃縮塩水] + [(②-c)ALPS処理水等] + [(②-d)Sr処理水等(ALPS処理前水)]  
 ※：タンク底部から水位計0%までの水量 (DS)  
 \*1：水位計0%以上の水量  
 \*2：汚染水発生量の算出方法で算出 [(建屋への地下水・雨水等流入量) + (その他移送量) + (ALPS薬液注入量)]  
 \*3：貯蔵量増加量並びに建屋への地下水・雨水流入量の4週間移動平均を追加(2022/11/24)

図3：滞留水の貯蔵状況

➤ 多核種除去設備等処理水の取扱いに関する海域モニタリングの状況について

- 港湾外2km圏内における海水のトリチウム濃度は、過去2年間の測定値から変化はなく、新たな測定点についても日本全国の海水の変動範囲<sup>※</sup>内の低い濃度で推移している。セシウム137濃度は、過去の福島第一原子力発電所近傍海水の変動原因と同じ降雨の影響と考えられる一時的な上昇が見られるが、過去2年間の測定値から変化はなく、新たな測定点についても日本全国の海水の変動範囲<sup>※</sup>内の低い濃度で推移している。トリチウムについては、2022年4月18日以降、検出限界値を下げてモニタリングを実施している。
- 沿岸20km圏内における海水のトリチウム濃度、セシウム137濃度とも、過去2年間の測定値から変化はなく、日本全国の海水の変動範囲<sup>※</sup>内の低い濃度で推移している。
- 沿岸20km圏外における海水のトリチウム濃度は、新たな測定点についても日本全国の海水の変動範囲<sup>※</sup>内の低い濃度で推移している。セシウム137濃度は、過去2年間の測定値から変化はなく、日本全国の海水の変動範囲<sup>※</sup>内の低い濃度で推移している。

※：下記データベースにおいて2019年4月～2022年3月に検出されたデータの最小値～最大値の範囲

日本全国(福島県沖含む)  
 トリチウム濃度：0.043 Bq/L ～ 20 Bq/L  
 セシウム137濃度：0.0010 Bq/L ～ 0.45 Bq/L

福島県沖  
 トリチウム濃度：0.043 Bq/L ～ 2.2 Bq/L  
 セシウム137濃度：0.0010 Bq/L ～ 0.45 Bq/L

出典：日本の環境放射能と放射線 環境放射線データベース <https://www.kankyo->

hoshano.go.jp/data/database/

- 採取点 T-S8 で採取された魚類のトリチウム濃度について、過去 2 年間の測定値から変化はない。新たな採取点で採取された魚類のトリチウム濃度のうち分析値の検証が済んだものも含め、日本全国の魚類の変動範囲\*と同等の低い濃度で推移している。魚類のその他の測定データについては確認中。

\*：上記データベースにおいて 2019 年 4 月～2022 年 3 月に検出されたデータの最小値～最大値の範囲

日本全国（福島県沖含む） トリチウム濃度（組織自由水型）：0.064 Bq/L ～ 0.13 Bq/L

- 2022 年 7 月以降に採取した海藻類のヨウ素 129 の濃度は、検出下限値未満（<0.1 Bq/kg(生)）であった。トリチウムについては、魚のトリチウム分析値の検証結果による分析手順の見直しにより、改善された手順による再分析に必要な試料量が残っていなかったため分析していない。なお、日本全国の海藻類のヨウ素 129 濃度の変動範囲としては、上記データベースにおいて 2019 年 4 月～2022 年 3 月に検出されたデータの最小値～最大値の範囲

日本全国 ヨウ素 129 濃度 0.00013 Bq/kg(生) ～ 0.00075 Bq/kg(生)

#### ➤ 多核種除去設備等処理水希釈放出設備及び関連施設等の設置工事の進捗状況について

- 測定・確認用設備／移送設備については、2022 年 8 月 4 日より、K4 エリアタンク周辺から、測定・確認用設備、移送設備の配管サポート・配管他の設置工事を開始。2023 年 1 月 16 日より、使用前検査を開始。
- 放水設備については、2023 年 4 月 26 日放水トンネルの掘進完了。今後、トンネル内および下流水槽の片付け作業の完了後、トンネル内の注水作業を行う。後続の到達管（シールドマシン）の撤去等の作業について、準備が整い次第、引き続き安全最優先で実施。
- 希釈設備のうち放水立坑（上流水槽）では、1 月 12 日より、ブロック（構外製作）の据付組立、2 月 9 日より底版部（底面）他のコンクリート打設を開始し、据付組立およびコンクリート打設、防水塗装、水槽内の水張り確認が完了。引き続き、堰の構築を行っている。
- 希釈設備のうち海水移送配管の基礎杭打設および基礎の躯体構築作業が完了し、配管他の設置工事を実施中。
- 5,6 号海側工事エリアでは、取水路開渠内の堆砂の撤去（浚渫）、仕切堤の構築（4 月 13 日完成）、4 月 18 日より透過防止工の一部撤去作業を実施。堆砂の撤去（浚渫）は、6 月中旬を目途に完了する予定。

#### 使用済燃料プールからの燃料取り出し

～耐震・安全性に万全を期しながらプール燃料取り出しに向けた作業を着実に推進～

##### ➤ 1 号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事

- 2021 年 4 月より、大型カバー設置へ向けた仮設構台の組立て作業等を構外ヤードで実施中。仮設構台、下部架構の地組が完了し、上部架構の地組が約 83%、ボックスリングの地組が約 7% 完了。
- 原子炉建屋周囲の作業ヤード整備を実施し、2021 年 8 月より大型カバー設置準備工事に着手。
- 仮設構台の頂部と近接するアンカーおよびベースプレートの設置を終えた箇所より、仮設構台を設置しており、3 月に西面、北面、東面の仮設構台の設置が完了した。
- また、西面、北面、東面の「はみ出しガレキ」の撤去作業が完了し、最上段を含めたベースプレートのアンカー削孔作業を実施している。

##### ➤ 2 号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事

- 建屋内では、2023 年 4 月 3 日から除染（その 2）の準備作業を実施中。2023 年 4 月 28 日から吸引除染を開始。
- 建屋外では、2023 年 5 月 13 日から燃料取り出し用構台 3 節目の設置作業を開始し、並行して

前室の床コンクリート受け型枠の設置作業を実施中。

- 構外では、鉄骨の地組（ユニット化）作業を継続して実施中。

#### 燃料デブリ取り出し

##### ➤ 1 号機 PCV 内部調査（後半）について

- 2023 年 3 月 4 日から 8 日にかけて、1 号機原子炉格納容器（PCV）の底部に水中ロボット ROV-B を投入し、ペDESTAL 外の堆積物 3D マッピング調査を実施。
- 今回の堆積物 3D マッピング調査結果と、2022 年 6 月に実施した ROV-C による堆積物厚さの調査結果を比較したところ、PCV 底部からの堆積物の高さの結果について双方のデータに相関性を確認。
- また、ROV-C による堆積物厚さ測定では、一部堆積物の高さを評価したが、今回の ROV-B による計 34 箇所の点群データの取得により、堆積物の高さの知見に関して、より広範囲かつ連続したデータを得ることができた。今後、より詳細な堆積物に係る調査について検討していく。

##### ➤ 2 号機 PCV 内部調査および試験的取り出しに向けた進捗状況

- ロボットアームについて、2022 年 2 月より実施している 現場を模擬した檜葉モックアップ試験を通じて把握した情報と、事前シミュレーション結果との差異を補正することで、燃料デブリ取り出し時の接触リスクを低減するべく、現在、制御プログラム修正等の改良に取り組んでいる。（改良点：制御プログラム修正・精度向上、アーム動作速度上昇、ケーブル取付治具の改良、視認性向上、把持部の改良等）
- また、2 号機現場の準備工事として、2021 年 11 月より X-6 ペネハッチ開放に向けた隔離部屋設置作業に着手しており、その中で発生した隔離部屋のゴム箱部損傷、ガイドローラ曲がり（地震対応）、遮へい扉の位置ずれ、押付機構部品の破損等について対策を実施し、2023 年 4 月に隔離部屋の設置が完了したことから、現在、X-6 ペネハッチ開放に向けた作業を実施しているところ。その後も、X-6 ペネ内の堆積物除去作業等を控えており、安全かつ慎重に作業を進める必要がある。

#### 固体廃棄物の保管管理、処理・処分、原子炉施設の廃止措置に向けた計画

～廃棄物発生量低減・保管適正化の推進、適切かつ安全な保管と処理・処分にに向けた研究開発～

##### ➤ ガレキ・伐採木の管理状況

- 2023 年 4 月末時点でのコンクリート、金属等のガレキの保管総量は約 389,000m<sup>3</sup>（先月末との比較：+800m<sup>3</sup>）（エリア占有率：76%）。伐採木の保管総量は約 118,700m<sup>3</sup>（先月末との比較：微増）（エリア占有率：68%）。使用済保護衣等の保管総量は約 16,800m<sup>3</sup>（先月末との比較：+1,000m<sup>3</sup>）（エリア占有率：66%）。放射性固体廃棄物（焼却灰等）の保管総量は約 38,100m<sup>3</sup>（先月末との比較：微増）（エリア占有率：60%）。ガレキの増減は、港湾関連工事、フランジタンク除染作業、1～4 号機建屋周辺関連工事等による増加。

##### ➤ 水処理二次廃棄物の管理状況

- 2023 年 5 月 4 日時点での廃スラッジの保管状況は 493m<sup>3</sup>（占有率：70%）。濃縮廃液の保管状況は 9,447m<sup>3</sup>（占有率：92%）。使用済ベッセル・多核種除去設備の保管容器（HIC）等の保管総量は 5,562 体（占有率：86%）。

##### ➤ 増設雑固体廃棄物焼却設備 運転再開について

- 増設雑固体廃棄物焼却設備で焼却した焼却灰を収納した容器は、荷棚へ積み上げるためクレーンを使用しているが、3 月に一部の容器の重量がクレーンの定格荷重を超過していることが判明。
- 容器の体積を物理的に半分程度に制限することや、重量計を設置することで、クレーンの定格荷重を超えないよう対策を図る。対策について、労働基準監督署に問題のないことを確認。
- 対策を踏まえ、6 月中に増設雑固体廃棄物焼却設備の運転を再開する予定。

##### ➤ 減容処理設備空調バランスの不具合に伴う竣工遅延について

- 減容処理設備は、瓦礫類のうち金属を切断処理、コンクリートを破砕処理するための設備であり、放射性物質の建屋外への飛散防止の為、一部の部屋は負圧で維持。

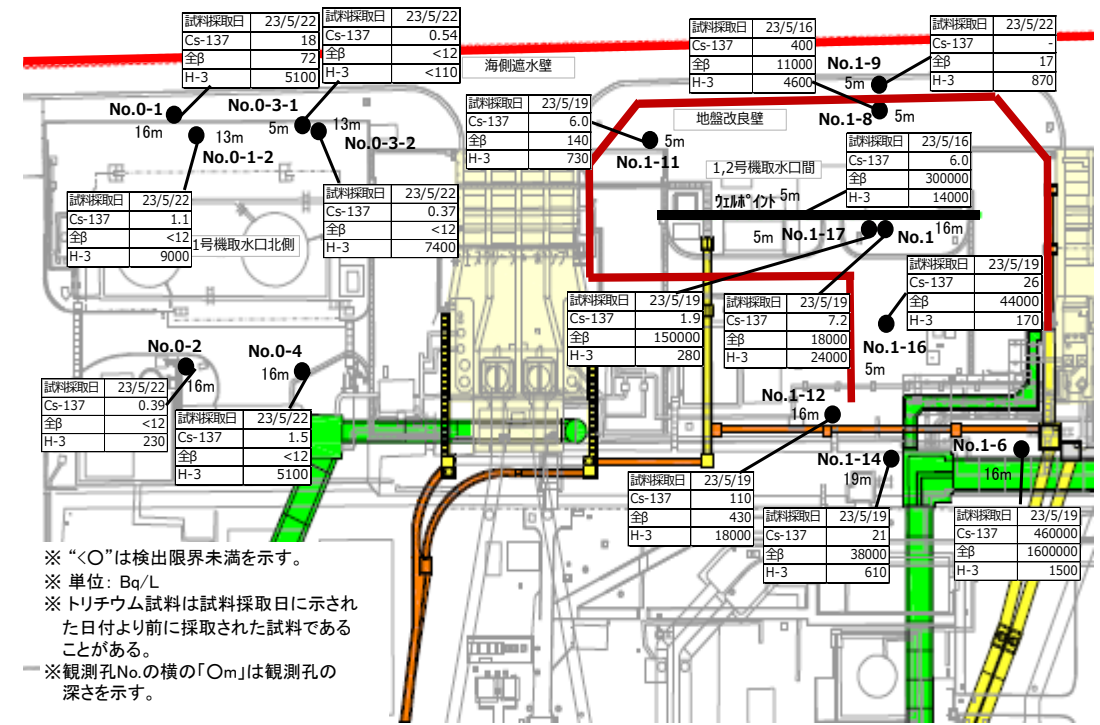
- 2023年4月10日以降、空調設備のバランス調整作業を実施したが、設計通りにバランスがとれず、一部室圧計で正圧を確認。
- 2023年4月に使用前検査、2023年5月に竣工を予定していたが、使用前検査受検を延期。
- 空調バランスの不具合について原因調査を行い、6月中旬までに対応方針を決定する。

**放射線量低減・汚染拡大防止**

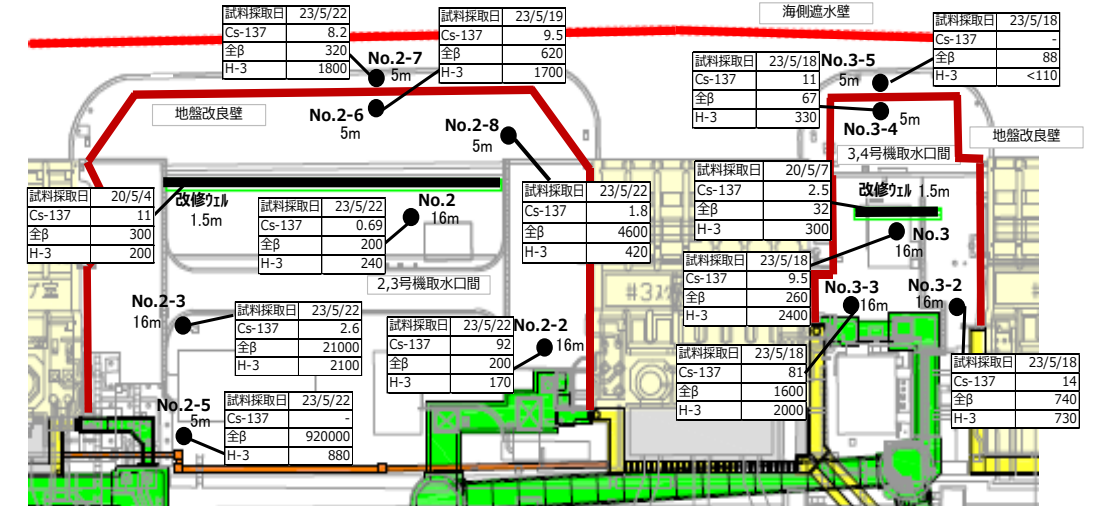
～敷地外への放射線影響を可能な限り低くする為、敷地境界における実効線量低減や港湾内の水の浄化～

➤ 1～4号機タービン建屋東側における地下水・海水の状況

- 1号機取水口北側エリアでは、H-3濃度は全観測孔で告示濃度 60,000Bq/L を下回り、全体としては横ばい又は低下傾向の観測孔が多い。全ベータ濃度は全体としては横ばい傾向にあるが、2020年4月以降に一時的な上昇が見られ、現在においても No.0-1-2、No.0-3-1、No.0-3-2、No.0-4 など多くの観測孔で上下動が見られるため、引き続き傾向を注視していく。
- 1,2号機取水口間エリアでは、H-3濃度は全観測孔で告示濃度 60,000Bq/L を下回り、No.1-14、No.1-16、No.1-17 など上下動が見られる観測孔もあるが、全体的に横ばい又は低下傾向の観測孔が多い。全ベータ濃度は、全体としては横ばい傾向にあるが、No.1-6、No.1-9、No.1-11、No.1-12、No.1-14、No.1-16、No.1-17 など多くの観測孔で上下動が見られるため、引き続き傾向を注視していく。
- 2,3号機取水口間エリアでは、H-3濃度は全観測孔で告示濃度 60,000Bq/L を下回り、No.2-3、No.2-5、No.2-6、No.2-7 など上下動が見られる観測孔もあるが、全体的に横ばいの観測孔が多い。全ベータ濃度は、全体としては横ばい傾向にあるが、No.2-5 など上昇や変動が見られる観測孔もあり、引き続き傾向を注視していく。
- 3,4号機取水口間エリアでは、H-3濃度は全観測孔で告示濃度 60,000Bq/L を下回り、全体的に横ばい又は低下傾向の観測孔が多い。全ベータ濃度は、全体としては横ばいであるが、No.3-4、No.3-5 の観測孔で上下動がみられるため、引き続き傾向を注視していく。
- タービン建屋東側の地下水についてエリア全体として、全ベータ濃度と同様にセシウム濃度についても全体としては横ばい傾向にあるが、上下動が見られ最高値を更新している観測孔もあり、No.0-3-2、No.1、No.1-6、No.2-5、No.2-6、No.3-3 については、変動調査を実施している。
- 排水路の放射性物質濃度は、降雨時に濃度が上昇する傾向にあるが、全体的に横ばい傾向。D排水路では敷地西側の線量が低いエリアの排水を2022年8月30日より通水開始し、低い濃度で横ばい傾向。2022年11月29日より連続モニタを設置し、1/2号機開閉所周辺の排水を通水開始。
- 1～4号機取水路開渠内エリアの海水放射性物質濃度は告示濃度未満で推移しており、降雨時に一時的な Cs-137 濃度、Sr-90 濃度の上昇がみられるが、長期的には低下傾向。海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、濃度が低下。メガフロート関連工事によりシルトフェンスを開渠中央へ移設した2019年3月20日以降、Cs-137濃度について、南側遮水壁前が高め、東波除堤北側が低めで推移。
- 港湾内エリアの海水放射性物質濃度は告示濃度未満で推移しており、降雨時に一時的な Cs-137 濃度、Sr-90 濃度の上昇がみられるが、長期的には低下傾向であり、1～4号機取水路開渠内エリアより低いレベル。海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、濃度が低下。
- 港湾外エリアの海水放射性物質濃度は、海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、Cs-137濃度、Sr-90濃度が低下し、低濃度で推移。Cs-137濃度は、5,6号機放水口北側、南放水口付近で気象・海象等の影響により、一時的な上昇を観測することがある。Sr-90濃度は、港湾外（南北放水口）で2021年度に変動が見られたが、気象・海象等による影響の可能性など引き続き傾向を注視していく。



<1号機取水口北側、1,2号機取水口間>



<2,3号機取水口間、3,4号機取水口間>

図4:タービン建屋東側の地下水濃度

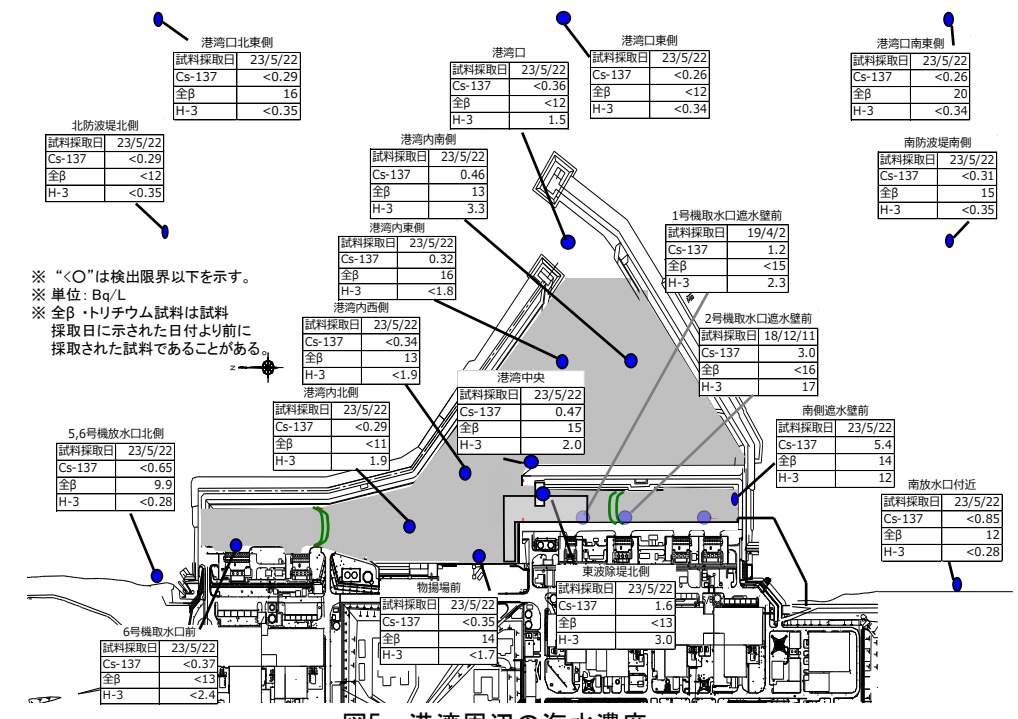


図5: 港湾周辺の海水濃度

必要作業員数の見通し、労働環境、労働条件の改善に向けた取組

～作業員の被ばく線量管理を確実に実施しながら長期に亘って要員を確保。また、現場のニーズを把握しながら継続的に作業環境や労働条件を改善～

➤ 要員管理

- 1ヶ月間のうち1日でも従事者登録されている人数（協力企業作業員及び東電社員）は、2023年1月～2023年3月の1ヶ月あたりの平均が約9,600人。実際に業務に従事した人数は1ヶ月あたりの平均で約7,700人であり、ある程度余裕のある範囲で従事登録者が確保されている。
- 2023年6月の作業に想定される人数（協力企業作業員及び東電社員）は、平日1日当たり4,000人程度と想定され、現時点で要員の不足が生じていないことを主要元請企業に確認。なお、至近2年間の各月の平日1日あたりの平均作業員数（実績値）は約3,000～4,600人規模で推移。
- 福島県内の作業員数は微減、福島県外の作業員数は減。2023年4月時点における地元雇用率（協力企業作業員及び東電社員）は横ばいで約70%。
- 2020年度平均線量は2.60mSv/人・年、2021年度平均線量は2.51mSv/人・年、2022年度平均線量は2.15mSv/人・年である（法定線量上限値は5年で100mSv/人かつ50mSv/人・年、当社管理目標値は20mSv/人・年）。
- 大半の作業員の被ばく線量は線量限度に対し大きく余裕のある状況である。

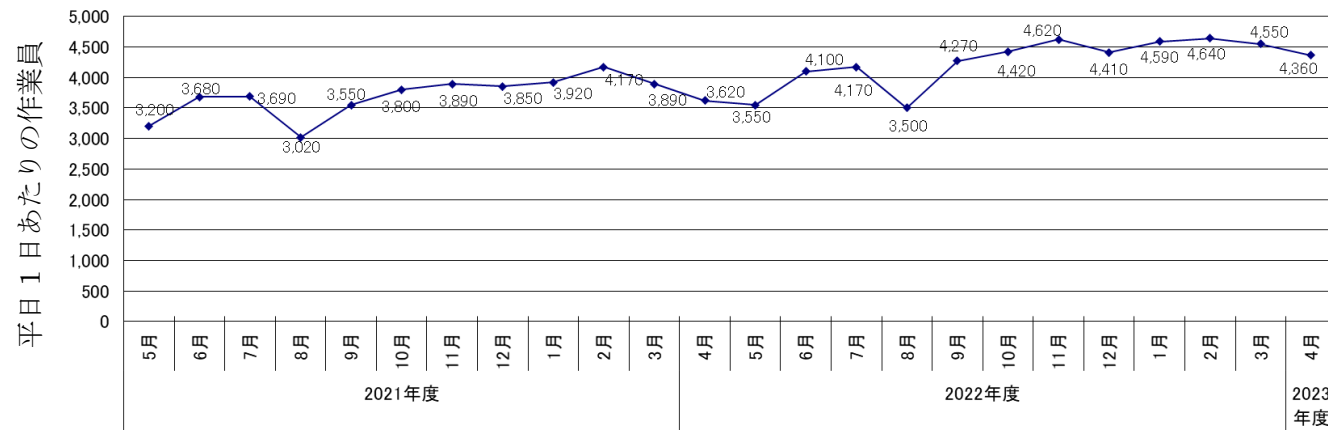


図6：至近2年間の各月の平日1日あたりの平均作業員数（実績値）の推移

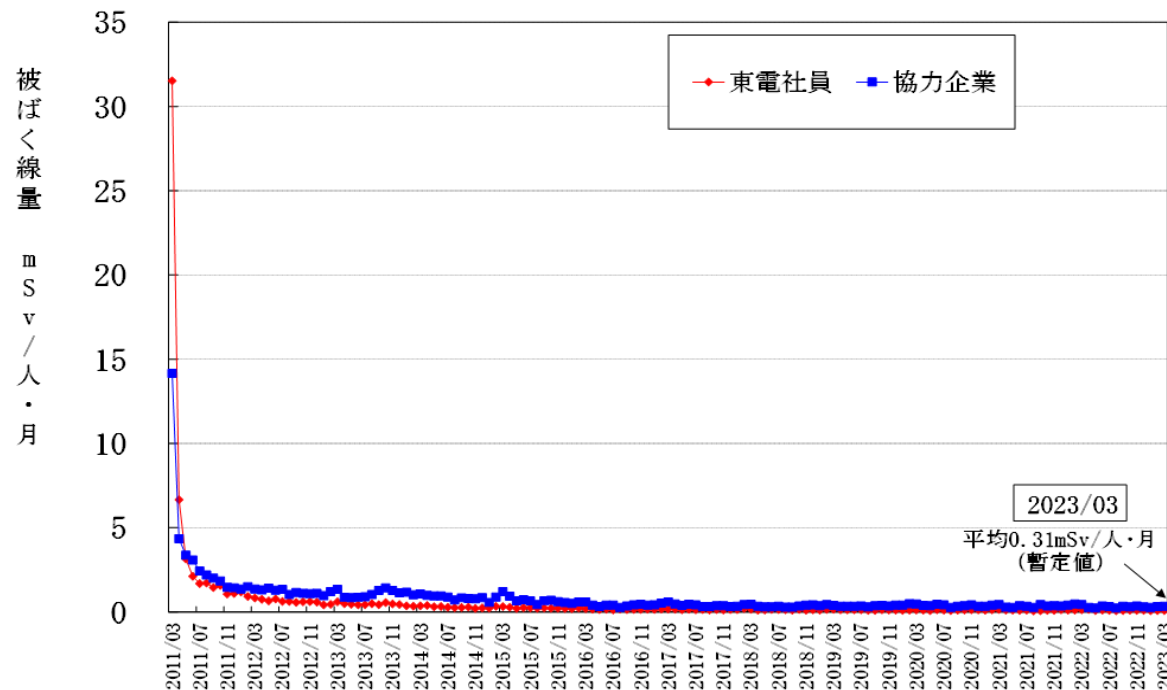


図7：作業員の各月における平均個人被ばく線量の推移（2011/3以降の月別被ばく線量）

➤ 新型コロナウイルス感染防止対策の見直しについて

- 福島第一原子力発電所においては、東京電力HDの方針に則り、2023年5月8日以降、感染症対策の各施策は原則廃止とするが、BCP（事業継続計画）の観点から、密集・密室場所でのマスク着用、通勤・構内バスの段階的な運用の見直し、当直員との接触回避等の職場内での感染拡大防止施策の一部については、当面継続。
- 5月8日以降6月末目途で、社会動向や職場内の感染状況等を踏まえ、当直員を含めた全面的な施策の廃止を検討。
- 引き続き、基本的な対策（体調不良時の医療機関受診、換気、3密回避、こまめな手洗い等）を一人ひとりが適切に実施し、安全最優先で廃炉作業に取り組んでいく。

➤ インフルエンザ・ノロウイルスの発生状況（感染予防・拡大防止対策の終了）

- 2023年3月以降インフルエンザ感染者の発生が無いことから、感染症予防・拡大防止対策を2023年4月末で終了した。今シーズン（2022年～2023年）の累計は、インフルエンザ感染者25人、ノロウイルス感染者4人。昨シーズン（2021年～2022年）の累計は、インフルエンザ感染者0人、ノロウイルス感染者7人。

（注）東電社内及び各協力企業からの報告に基づくものであり、所外の一般医療機関での診療も含む。報告対象は、1F・2Fの協力企業作業員及び東電社員。

- 昨シーズンと比べ、インフルエンザ感染者が25人の増、ノロウイルス感染者は3人の減。
- インフルエンザについては、シーズン前に、新型コロナウイルスとの同時流行が懸念されていたものの、コロナ禍以前ほどにはならなかった。新型コロナウイルスに対する感染症予防対策の効果が継続しているものとみられる。ノロウイルスについても、コロナ禍以前と比べて感染者数は低く抑えられており、集団発生もない。食中毒の発生もなく、感染拡大防止対策が功を奏していると思われる。

➤ 熱中症の発生状況

- 熱中症の発生を防止するため、酷暑期に向けた熱中症対策を2023年4月より開始。
- 2023年度は5月22日までに、作業に起因する熱中症の発生は0件（2022年度は5月末時点で、0件）。引き続き、熱中症予防対策の徹底に努める。